



Title	マムルーク朝時代末期の歴史家をめぐる知的環境 : アブドル＝バースィトにとってDhaylを書くということと自伝的記述について
Author(s)	菊池, 忠純
Citation	関西アラブ・イスラム研究. 2002, 2, p. 41-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105818
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マムルーク朝時代末期の歴史家をめぐる知的環境

—— アブドル=バースィトにとって

Dhayl を書くということと自伝的記述について——

菊池 忠純*

The Intellectual Milieu of a Historian in the Later Mamluk Period

—— Writing the *Dhayl* and the Autobiographical Description

in the Case of the Chronologies of ‘Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī ——

I would like to research the two tendencies of writing *dhayls* (“continuation”) to the preceding authoritative histories and inserting the autobiographical description in the historical narrative on the whole, in the case of historians in the later Mamluk Period, especially ‘Abd al-Bāsiṭ (d. 920/1514), about whom I wrote two articles, one for his method of constructing the narrative of his history *ar-Rawḍ* and one for analyzing his account of his famous father Khalīl b. Shāhin in the same *ar-Rawḍ* from the unique manuscripts preserved in the Vatican Library.

In this paper, I compare the preface of *Nayl* written by ‘Abd al-Bāsiṭ and that of *Wajīz* (and *adh-Dhayl at-Tāmm* which I identify *Wajīz*) written by as-Sakhāwī, both of which are intended to be *Dhayls* to adh-Dhahabī’s *Duwal al-Islām*. In the both prefaces two authors insist on following adh-Dhahabī’s method of writing, but add some differences. While as-Sakhāwī asserts the increasing of the part of biographies of the person who died in a year, ‘Abd al-Bāsiṭ asserts to arrange the events every each month. But in the accounts of the contemporary events both authors adopt their own way of historical narratives to varying degrees. (the method of account of *at-Tibr al-Masbūk* as for as-Sakhāwī and of *ar-Rawḍ* as for ‘Abd al-Bāsiṭ).

Thanks to the recent studies of the Arabic autobiographies, in the 15th and the 16th centuries a sense of “autobiographical anxiety” emerged. Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī wrote his autobiography in his biographical dictionary of qāḍīs in Egypt (*Raf‘ al-Iṣr*). It is said that his description have an effect on as-Sakhāwī and as-Suyūṭī and thereafter their pupils.

‘Abd al-Bāsiṭ’s father Khalīl b. Shāhin was on intimate terms with Ibn Ḥajar. ‘Abd al-Bāsiṭ began his *ar-Rawḍ* from his birth year after the model of Ibn Ḥajar’s *Inbā’*. He also includes his autobiographical accounts (for example his travel to the Maghrib and the Iberian Peninsula) in his chronology *ar-Rawḍ* for giving his thanks for the God.

* 四天王寺国際仏教大学 助教授

1. はじめに

アブドル=バースィト・アル=ハナフィー (920年/1514年没) の *ar-Rawḍ* と *Nayl* という2つの歴史書の記述を検討すると、両者とも序文において先行する歴史書の *Dhayl* を書くことを目指して執筆することを明記している¹⁾。また私は、*ar-Rawḍ* のなかに著者の自伝的記述がしばしば書き込まれていることに注目した。本稿では、彼の著作 *Nayl* の序文を検討して彼の *Dhayl* についての考え方をアッ=サハーウィーのそれと比較する。次に彼の自伝的な叙述の歴史的な背景としてイブン・ハジャルの自伝的な記述を紹介する。この2つの側面からアブドル=バースィトを通じて当時の知的環境の一端を考察することにした。

2. *Dhayl* を書く伝統と歴史家

先行する歴史書の *Dhayl* を書くという行為とその伝統について考えると、単に「補遺」あるいは「続編」ということにとどまらない形式と内容の多様性が指摘できる²⁾。

本稿が対象とする時代には、特にアッ=ザハビー (748年/1348年没) の歴史書 *Tārikh al-Islām wa Ṭabaqāt Mashāhīr wa-l-Aʿlām* が、多くの著作者にとって *Dhayl* の対象となった著作であった³⁾。この著作は、預言者ムハンマドの時代から700年/1300年あるいは715年/1315年までを対象として70の世代(タバカ)ごとに、年代記部分とそれに比較すると6あるいは7倍の量を持つ伝記集という2つの部分からなっている。この *Dhayl* については6種作成され、そのうち3種が現存している。それは、アッ=ザハビー自身によって701年/1301-2年から740年/1339-40年を対象としたもの、そしてʿAbd ar-Raḥmān al-ʿIrāqī と息子 Aḥmad による701年/1301-2年から786年/1384-4年を対象としたもの、それに Ibn Qāḍī Shuhba による701年/1301-2年から790年/1388年を対象としたものである⁴⁾。

またこの書物 *Tārikh al-Islām* は、大部なために摘要が作られたが、伝記集と年代記という性格を持っていたために、その摘要も伝記情報に重点を置いたものと、歴史書の面に重点を置いた2種に分けることができる。

ここで問題とするのは、アッ=ザハビー自身が、預言者の没した年から744年/1343年までを対象とした政治史の摘要である *Duwal al-Islām* である。こ

1) 菊池 (oo): p. 39, *Nayl*: fol. 1b (図1 参照)。

2) Farah, C. E. (67): pp. 1-2.

3) 52 vols, ed. by ʿUmar ʿAbd as-Salām Tadmūrī, Beirut, 1987-2000.

4) E. I., art. "AL-DHAHABI" by Moh. Ben Cheneb-(J. de Somogyi) p.215, Farah, C. E. (67): p.21.

の書物の *Dhayl* については、アッ=サハーウィー (as-Sakhāwī, 902年/1497年没) の2つの書物が注目されてきた。Farah, C. E. によると、それは745年/1345年から898年/1493年までの *Wajiz al-Kalām fi-dh-Dhayl ‘alā Duwal al-Islām* と、後にこれを完成させたものとして741年/1340年から901年/1495年を対象とした *adh-Dhayl at-Tāmm bi-Duwal al-Islām* である⁵⁾。この2つの著作は、近年相次いで刊行された。Farah, C. E. は述べていないが、アブドル=バーシートの *Nayl* も同じ *Duwal al-Islām* の *Dhayl* として書かれた著作であることから、アッ=サハーウィーの *Dhayl* と比較することによって、それぞれの著作の特徴を示すことが出来よう。

アッ=サハーウィーの刊行された2つの著作を検討すると幾つかの疑問点が指摘される。*Wajiz al-Kalām fi-dh-Dhayl ‘alā Duwal al-Islām* の校訂者である Bashshār ‘Awwād Ma‘rūf は、その序文において、主にテキストとしたのは、Bodleian Library 508, 611 の2巻本であるが、745年から892年の部分にはアッ=サハーウィーによる書き込みがあり、先ず892年までが最初に書かれ、その後898年までの部分が書き継がれたことがうかがわれるとともに、Mujir ad-Dīn al-‘Ulaymī (928年没) が書いた898年から901年の部分は970年に付け加えられたものであるという。もう一つの写本 Köprülü Library 1189 は895年までで、それに続く部分は失われたものであるという⁶⁾。

一方、*adh-Dhayl at-Tāmm bi-Duwal al-Islām* の序文によると、この書物は745年から901年までをあつかったもので⁷⁾、校訂の底本は、チュニスの国立図書館 (Dār al-Kutub al-Waṭaniyya) 6856で、その写本は、979年に作成されたものであるという⁸⁾。この校訂本は全3巻の予定で第三巻にインデックスを付して刊行すると序文に述べられているが、第二巻以降未刊であり、中断したものと思われる。

元の写本を調査せず、また Farah, C. E. が根拠とした写本も実見していないが、この2つの校訂本の序文を比較するとほぼ同文であり、刊行された本文部分もほぼ同文であることから、私は、この異なった書名を持つ2つの著作は同じものではないかと今のところは考えている。前掲の *Wajiz* の校訂者の一人である Bashshār ‘Awwād Ma‘rūf の解説文にあるように、別人が付け加えた分を含めて、後述するように序文にある “*dhayl tāmm*” を書名にしたのではないかと考える。死の前年である901年までアッ=サハーウィー自身が

5) Farah, C. E. (67): p. 20.

6) *Wajiz*: 序文部分の pp. 23-6.

7) *adh-Dhayl*: p. 8 (Maḥmūd al-Arnaʿūt 執筆)。上述したように Farah, C. E. (67): p. 20 は741年からとしているが、この校訂本の始まりは745年である。

8) *adh-Dhayl*: pp. 55-6 (校訂者 Ḥasan Ismāʿīl Marwa 執筆)。

書き継いだという点には疑問がある。今のところは745年から898年までは、彼が *Duwal al-Islām* の *Dhayl* を書いたことは確かであろう。

次に、アッ=サハーウィーのこの二種の校訂本の序文 (ほぼ同文) のアブドル=バースイトの *Nayl* の序文を比べると、*Dhayl* を書き継ぐことに、どのような共通点と相違点が指摘できるであろうか。

アッ=サハーウィーは、序文において、これはハーフィズと作家たちの師であるアッ=ザハビー (Abū ‘Abd Allāh adh-Dhahabī) の『イスラームの諸王朝』の完全な *Dhayl* である (*dhayl tāmm ‘ala Duwal al-Islām*) と述べ、次いでアッ=ザハビーのこの著作が描写に優れ、適切に言葉を用い、「優れた元になる著作 (aṣl) となり、遂に彼の長所は彼の父と彼の祖父から (min abīhi wa jaddihi) 受け継がれ、彼の努力と彼の熱心さで (bi-ijtihādihi wa jiddihi) 確立され、彼の作品が誉れある行為に数えられ、最初の者が続く者に実に多くのものを残したのかと言われるに値するものとなった」と著作への賛辞が述べられ、次にアッ=サハーウィーの著作方針が述べられる。それはアッ=ザハビーの方法に従って、少々広げはするが彼の摘要のやり方を踏襲するとしている。また、「私が選んだ大部分は私が目撃したものであり、違いがあるときにはそれを調べ、よく知っている人々に信頼を置き、その導きに従った。また (アッ=ザハビーの書物の) 元の名前にたがうことなく王朝に関連したことを探求した」。しかし年次ごとにその年に亡くなった伝記部分を付け加えるとしている⁹⁾。

この二種の校訂本文 (同じくほぼ同文) を検討すると、確かにこの著作は、前半においては先行する他の著作者の記述を資料として最初の方針が貫徹されている。しかし後半になると彼の扱う対象が広がり政治史以外の部分を含んでいる。それについて895年の叙述の始めに述べているように、彼自身の別の著作である *at-Tibr al-Masbūk* (845-851年/1441-1447年を対象とした年代記でこれ自体 al-Maqrīzī の *Suluk* の *Dhayl* である) の方法を適用しようという意志が見られ、王朝の情報のみに限らず、*at-Tibr* と同様に様々な出来事が扱われている¹⁰⁾。すなわち、伝記部分をのぞきアッ=ザハビーと同様な様式で執筆することを序文で述べているが、同時代を叙述するにあたり、微妙に変化して、彼自身の歴史叙述の特徴がはっきりと表れている。

一方アブドル=バースイトは、序文において「アッ=ザハビー (ash-Shaykh Shams ad-Dīn adh-Dhahabī) による『イスラームの諸王朝』と呼ばれる歴史の摘要は、気品があり素晴らしい摘要集であり優雅な技量でまとめられた書物

9) *adh-Dhayl*: pp. 65-6, *Wajīz*: vol. 1, pp. 3-4.

10) *Wajīz*: vol. 3, p. 113.

で、数多くの有名な出来事を含み、指導者たちの点鬼簿は熟達した忠告である。この書物は744年で終わっている。その後彼の天命が尽き、今日に至るまで中断されたままである。この著作に親しんだものは月々にそして年々に生じたことに（同様な書物を）待ち望んでいる。

そうこうしているうちに、著名な名士のうち私の親愛なる同胞や友人たち (ba‘du khulliṣi ikhwānī wa aḥibbā‘ī)、高貴な知識人で高貴な人々でさえ私に（執筆を）求め、そして繰り返し私に何度も、大部の歴史書から彼以外の人間には考えられなかったやり方で作り上げた出来事と点鬼簿で、このように時代を扱うアッ=ザハビーの方法と同様な方法で、その *Dhayl* を書くように求めた。そこで私は、私がそれに値する者ではないことは承知しているが、これに答えてこの *Dhayl* をまとめ、彼らの要望を満たした。私は諸王朝と年次に従って出来事を並べたが、月ごと（に配置すること）を付け加えた。私はそこに有名で重要なことを記した。もしそれが（アッ=ザハビーの）元の書物に比べて詳しいと考えられるならば、我々が述べたように *Dhayl* を書くことにおいて彼以外のやり方をしなかったと弁明するのみである。」

そして、出来事を出来る限り短く要約して述べているが、よく考える者や洞察力に優れた人々には、その意味するところは明らかであるだろうと述べて、次いで *Nayl al-Amal fi Dhayl ad-Duwal* (『諸王朝の *Dhayl* における希望の獲得』) と書名をつけたこと、そして著作者 (al-muṣannaf、すなわちアッ=ザハビー) が執筆を終えた年 (744年) から執筆を始めたが、それは特に公正な者 (al-munṣif) にとって（自分の方法が違っていないことを）明らかにするためであると述べている。

アブドル=バースィトのこの *Nayl* は896年/1490年までを扱っているが、もう一つの特徴は、本文中にしばしば「詳しくは *ar-Rawḍ* に述べた」とあるように、時代的に重なる部分では、彼のより浩瀚な歴史書である *ar-Rawḍ* (現存しているのは、欠落部分があるが、844-874年/1440-70年までの年代記) の要約版となっていることである。

以上、アッ=サハーウィーとアブドル=バースィトが、それぞれ別個に著作したアッ=ザハビーの『イスラームの諸王朝』の *Dhayl* について比較した。共通して摘要という性格を維持すると述べてはいるが、両者の歴史叙述の特徴を反映して、特に同時代の叙述については、それぞれ独自性を明確にして、単なる続編に終わっていないといえよう。

アブドル=バースィトの序文に注目すると、その叙述の形式において月ごとに叙述する年代記的枠組みを維持することを明記するとともに、彼に執筆を慫慂した集団の存在をはっきりと示している。この集団はどういう人々から構成されていたのが検討の対象となろう。また *ar-Rawḍ* が887年から890年

の間に執筆され、*Nayl* は896年以降に執筆されたことが推察されることから、アッ=サハーウィーの執筆と時期的に近接しているといえる。そうであれば明確に述べてはいない相互の関係を考えることも課題となるであろう。

3. 自伝的記述を書くことの背景

アラビア語で書かれた自伝についての最近の研究では、これまでは西洋との比較の視点から、自伝の名に値するものの存在は否定的に考えられてきたが、西洋の尺度を他の世界に当てはめることに疑問を呈して、一見職務の経歴の羅列に見えるものの中に自己を表現しているのではないかと問い、各地域の文学的伝統における自己表現の方法を検討しようという試みがなされている。自伝を書く根拠として『コーラン』93章11節すなわち「主のみ恵みをいつも話してやれ」の部分を引用することが指摘されている¹¹⁾。この節は預言者ムハンマドに、孤児の彼を庇って神が恵みを与えたことについて感謝することを命じたものであるが、後に個人が自分の人生における神の恵みを述べることを義務とも見なす心情を育てたのである。そして自己を表現する方法として、子供時代の失敗の叙述、行動を叙述することで感情を示すこと、本人あるいは他者の本人についての夢の叙述、詩による感情の表現などがあげられている¹²⁾。また時代的な展開については、12世紀から14世紀には個々の著作者の自伝的な記述が相互に影響しあい、15世紀と16世紀になると自伝的な叙述が多く見られることが指摘されている¹³⁾。

上述のような研究動向を考えると、アブドル=バースィトの歴史書に見られる自伝的記述をもたらした時代的背景の一端がうかがわれる。直接的に影響を受けた叙述については、イブン・ハジャルと彼の関係が浮かび上がる。彼の父ハリール・ブヌ・シャーヒンはイブン・ハジャルの友人であり、苦境に遭ったときに彼を牢から釈放させるのに力を尽くしたとも伝えている¹⁴⁾。またイブン・ハジャルの年代記 *Inbāʿ* (T) は、その由来は明らかではないが、書名が書かれた一葉は色彩が施された立派な写本であるとともに、その余白に見られるアブドル=バースィトの書き込み部分が彼の大部な年代記 *ar-Rawḍ* を書くときの草稿ともいえることは既に拙稿で明らかにしたものである。またイブン・ハジャルの *Inbāʿ* が著者の生年から始めていることに倣ってアブドル=バースィトも自分の生年から *ar-Rawḍ* を書き始めていることも指摘した。

11) Reynolds, D. F. (O1): p. 61.

12) Reynolds, D. F. (O1): pp. 42-3, 243

13) Reynolds, D. F. (O1): p. 241.

14) 菊池(oo): 表1 p. 70

このような個人的な関係と強い影響をうかがわせる史料から、アブドル＝バースィトが著書の中に自伝的な要素を含めたことに、イブン・ハジャルの影響を考えることが出来よう。イブン・ハジャルはカーディーの伝記集をまとめるにあたり、彼自身がカーディーとなるまでの自伝を滑り込ませている¹⁵⁾。それは三人称で書かれているが、まさに彼自身のこの時点での自己表現といえるものである。以下にその部分を示す。

‘Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī, Aḥmad b. ‘Alī b. Muḥammad b. Muḥammad b. ‘Alī b. Aḥmad、家系はアスカラーン出身で、エジプトで生まれ育ち、カイロに居住している。彼は773年/1372年シャアバーン月に生まれた。彼の父は777年/1375年ラジャブ月に亡くなった。彼の母はこの前に既に亡くなっており、彼はまだ子供であった。従って彼は孤児として成長した。彼は5歳になるまでコーラン学校 (kuttāb) には行かず、コーランを暗唱し終えたときには9歳になっていた。彼が (聖なるラマダーン月の夜に) tarāwīḥ の祈りをすることができたのはやっと785年/1383年で、既に12歳になっていた。

彼の後見人はエジプトの大商人で有名なライースの Zakī ad-Dīn Abū Bakr b. Nūr ad-Dīn ‘Alī al-Kharrūbī で、その年に彼は隣人となり、自分を支えてくれるものが一人もいなかった彼を庇護した。その年、彼はヒジャーズにおける権威者でメッカのイブラーヒームのお立ち台 (マカーム) のイマームの Rāḍī ad-Dīn aṭ-Ṭabarī の友人の最後の者である ‘Afīf ad-Dīn ‘Abd Allāh an-Nishāwarī のもとで、アル＝ブハーリーの『サヒーフ』を学んだ。しかし彼は彼の勉強 (samā‘uhu) を終了することは出来なかった。というのは、彼は作品全体を聴くことがなかったためである。しかし彼は、イジャーズ (ijāza shāmila l-marwiyātihi) を得た。

彼はシャイフの Shams ad-Dīn Muḥammad b. ‘Umar as-Sallāwī ad-Dimashqī の朗唱で学んだが、彼は al-Kharrūbī の居住地区の下にあるサファーに向かう出口の右手のサファー門にある家で教えていたが、そこはシャリーフ ‘Ajlān の娘であるシャリーファの ‘Aynā の家として知られているところであった。この家にはメッカの神聖なモスクを見下ろす窓があり、そこに座る者は誰でもカアバ神殿と黒石の角を見ることが出来た。聞き手と読み手はベンチに座ることなく前述の窓の下によく座ったものであった。伝記の主 (イブン・ハジャル) の先生 (mu‘addib) は、彼とともに学んでいる他の者とともに、よくそこに座ったものであった。読み手が朗唱するときには、先生はその本の終わりまで読み終えるまで彼らが耳を傾けるように命じた。しかし伝記の主 (イブン・ハジャル) は、しばしばなにやかやの必要なことを済ませるために外に出てしまい、列に連なる者がいなくなった。

15) *Raf‘* (57-61): vol. 1, pp. 85-8, *Raf‘* (98): p. 62-4, Reynolds, D. F. (01): pp. 80-2 はこの部分を訳しているが、いくつかの点で拙訳と違いがある。

私にとって、アル=ブハーリーの『サヒーフ』の先生は Shaykh Najm ad-Dīn al-Murjānī である。彼はそれをずっと後に適切に私に教えてくれたので、私は彼に大きなお陰を被っている。

その後、彼は諸知識の摘要 (mukhtaṣarāt) の書物を暗記した。また誰かが彼の後見人となる必要があり、Shaykh Shams ad-Dīn Muḥammad b. ʿAlī b. Muḥammad b. ʿĪsā b. Abī Bakr b. al-Qaṭṭān al-Miṣrī が、その役割を果たしてくれた。そこで彼は彼の講義に出席した。al-Qaṭṭān は、まだコーラン学校 (al-maktab) で勉強している彼に歴史を探求することに興味を抱かせ、ハディース伝承者の生涯 (aḥwāl) についての多くの事柄が彼の心をとらえた。

また彼は、Najm ad-Dīn b. Razīn と Salāḥ ad-Dīn al-Ziftāwī と Zayn ad-Dīn b. ash-Shihna の講義も聴いた。そして彼は796年/1394年から文学を探求して、詩を作り、預言者への頌詩や短い作品を作った。

その後、当代の最も偉大なハーフィズ (ḥāfiẓ al-ʿaṣr) である Zayn ad-Dīn al-ʿArāqī と面会したが、それは796年/1394年のラマダーン月であった。彼は10年間にわたり彼のもとに通い、彼はハディース学に魅了された。その年が終わる前に、彼のシャイフで、カイロの権威者 (musnid) である Abū Ishāq at-Tanūkhī のために、『al-Miʿat al-ʿUshāriyya』を集成した。

それを全部読んだ最初の者は (前述の有名なハディース学者である彼の先生の息子である) al-ḥāfiẓ の Abū Zarʿa b. Ḥāfiẓ al-ʿArāqī であった。

その後彼は、アレクサンドリアに旅立ち、当時の権威者たち (musnid) の講義を聴いた。後彼は巡礼を行い、イエーメンを旅した。彼はメッカ、メディナ、ヤンブウ、ザビード、タイズ、アデンやその他の町や村で講義を聴いた。

イエーメンで彼は、並ぶ者のないアラビア語の学者である Majd ad-Dīn b. ash-Shirāzī と出会い、彼の最も有名な作品の一つである『al-Qāmʿūs fi-l-Lughā』を受け取った。彼はこれらの諸都市で多くの学識者と会見した後、カイロに戻った。次に彼はアッ=シャームを旅してカティーヤ、ガザ、ラムラ、エルサレム、ダマスカス、アッ=サーリヒーヤやその他の村や町で学者の講義を聴いた。

彼がダマスカスに滞在したのは100日間であって、その間に彼が聴いたハディースはほぼ1000に上った。その中には、aṭ-Ṭabarānī の『al-Muʿjam al-Awsaṭ』や Abū ʿAbd Allāh b. Manda の『Maʿrifat aṣ-Ṣaḥāba』や Abū Yaʿlā の『Musnad』の大部分やその他偉大な書物からの一部分であった。

その後、彼は戻り、彼の偉大な先生たちの生涯について『Taʿliq at-Taʿliq』という彼自身の書物を完成させた。そして他の人たちは彼の権威で (ハディースを) 書くようになった (katabū ʿalayhi)。彼は依然としてシャイフの Sirāj ad-Dīn al-Bulqīnī の保護下にあったが、遂に彼に修了証書を与えた。al-Bulqīnī が彼に免状を与えた後に、シャイフ al-Ḥāfiẓ Zayn ad-Dīn al-ʿArāqī は、彼に免状を与えた (adhina lahu)。

その後彼は著作を始めて、808年／1406年からシャイフーニーヤ学院で『*al-Arbaʿin al-Mutabāyina*』を口述し、その後『*Ushāriyāt aṣ-Ṣaḥāba*』を約100回にわたり、何年もかけて口述した。その後彼は新ジャマーリーヤ学院のハディースの教授の職に就き、そこで口述したが、814年／1411年にその職を去ることになり口述を切り上げた。彼は著述に専念し、その後バイバルスィーヤ学院のシャイフ職に任命されたが、同時に新ムアイヤディーヤ学院でのシャーフィイー派法学の教授も担当した。その後彼は827年／1423年ムハッラム月27日にカーディー職に任命された。その後同年サファル月の初めから現在に至るまで口述の集まりを開いた。」

Reynolds, D. F. は、この記述を検討して次のように述べている。すなわちこの叙述には、いくつかの仕掛けがあるとす。若くして学問の世界に入ったのではないことを繰り返しているが、その年齢は当時の標準から見ても決して遅くはなかったこと、また彼が後にその権威者となるハディースの勉強において数多く失敗したことを述べているのは、後に続く弟子たちを激励する意味があったと解釈できるとしている¹⁶⁾。孤児であった子供時代の記述は、前述の『コーラン』93章11節を想起させる。逆境の時代に、神の庇護のもとで育ち、カーディーとなったことについて、神に感謝してそれまでの半生を語るのである。

イブン・ハジャルは前述の自伝部分以外にも自身について記すことが多かった。それはアッ=サハーウィー、アッ=スユーティーに影響を与えそれぞれの弟子たちも自伝を書くようになったと Reynolds, D. F. は述べるが¹⁷⁾、アブドル=バースィトもこの一人に数えることが出来よう。

4. おわりに

以上、先行する書物の *Dhayl* を書き継ぐことと、歴史書の中に自伝的な記述が挿入されていることに注目して、アブドル=バースィトをめぐる知的な環境について考えてみた。彼にアッ=ザハビーの『イスラームの諸王朝』の *Dhayl* を書くことを求めた集団の存在、また *Dhayl* とはいえ、彼独自の叙述形式を貫徹していること、そしてイブン・ハジャルの影響のもとにそれまでの半生について神の恵みに感謝するために自伝的叙述を年代記に含めたことが指摘できたといえよう。具体的な出来事の叙述を他の史料と比較することと、より広い時代背景から彼の著作を検討することが次の課題となる。

16) Reynolds, D. F. (O1): pp. 82-3.

17) Reynolds, D. F. (O1): pp. 86-7.

図1: Nayl: fol. 1b-2a

بسم الله الرحمن الرحيم
الدعاء عروفاً للاسلام بين الانام على الذكاء وبقرة الانان
والصلاة والسلام على من لا نبي بعده محمد خير الانام وصالح الطلام
الذي تشبهنا الذين حتى لا نستبان ونظف ثمان الله من بعدن بظلمه
خبره وجنده وحقاره عدوه وضمن حتى لنسلم الملوك الاكاسرو
والقياسو الجارية ذوق النجمان والرفيع من جملة له واحماجه
سيما الخنا الاربعه وذولا التسعة والسير للسننة المرفقة
المدمعة ومن بايعهم والتابعين لهم باحسان قال الخضر
في التاريخ السمي بدول الاسلام للفاظط العلامة الامام الشيخ
شمس الدين الذهبي فهداه الله برحمته ورضوانه كما اياهم بحجود
شانه معصرا انفا لطيفا ونجما في نظريه اعقوى على رذا الزقاق
والحوادث المشهورة ومهات الوجبات لالة الاعلام المهره
المنه وبقي منقطعا بعد ما الى ههنا لالة الاعلام المهره
والواقف عليه لا حداث على مدى المشهور
والاعوام حتى سألني صفر جمل من خراي وناجى
من اعيان الفضلا بولا الحما الاخلا النبلا اصلا
وكرم على غيرنا مرة التسوال في تزيينه على الخرج
في الاله من اللنوال بزمان على لاله في الحوادث
والوفاته بغير عز النظر في غير من التواريخ المطولات
فا جبت الى الدرس على نبي لست ههنا المش
وجهت ههنا الذيل ووقيت فيه بما سأل

ورقمته

ورقمته
والاعوام والاشهر المشهور وانواعها مطولة المشبه في الظاهر
فأحد ردهما كونه من الاستقفا عن عين في سله وحمله الملك
ما ذكرناه في غايه الاخبار والاخصار اذ هو سله نظريه الملك
والاستقصاء ونصير كل جمعه وفراج شفا عروفا وضرب
بالاعلام في الدول والامارات فبه من السنة التي
المنصف لثقة طاهر لا سيما من هو مصنف وانا ارجو ان الله
انني اقول في الاقدم وانفذت عا في كل عظمها والمخاليق والاعمال
والسلك في سنة وخبرها في طاه وشكرها في حفا
والاعمال في القربى والنهات والجميع من طهر في كية
والوقف على شفا وههنا من تروعا في المقصود بوزن الملك
الوقوف في الشتان وطية الحلال ههنا
سنة اربع واربعين وسبع مائه
في خمس مائة في كية من قدم بغير الحاج من لاله الذوق والمصنف
على انما بين الشاف ونهات الاحقاد من الاصر من مع الحاج في كية
وعلى من هم من سنة ومقتله ثبات با حافة من الجهد والعامية
ونزل ادم في كية كية في كية في كية في كية في كية في كية في كية
وهو في كية في كية في كية في كية في كية في كية في كية في كية
وقد اصابه منها اخرج الاسرى من الارض من الروم في كية
الاسرى من كية في كية في كية في كية في كية في كية في كية في كية
بما طاهر الاصر من كية في كية في كية في كية في كية في كية في كية في كية

〔史料〕

- adh-Dhayl*: as-Sakhāwī, Shams ad-Dīn, *adh-Dhayl at-Tāmm ‘alā Duwal al-Islām li-dh-Dhahabī*, vol. 1, ed. by Maḥmūd al-Arnā’ūṭ et al., Bayrūt-al-Kuwayt, 1992.
- Inbā’ (T)*: Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī, *Inbā’ al-Ghumr bi-Anbā’ al-‘Umur*, Topkapı Saray Müzesi kütüphanesi, III Ahmet, 2941/2.
- Nayl*: ‘Abd al-Bāsiṭ, *Nayl al-Amal fī Dhayl ad-Duwal*, Bodleian Library, MS. Hunt. 285, Hunt. 610 (Uri Arab. Moh. 802, 812. Nicoll. p. 596).
- Raf’ (57-61)*: Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī, *Raf’ al-Iṣr ‘an Quḍāt Miṣr*, ed. by Ḥamid ‘Abd al-Majīd et al., 2 vols, al-Qāhira, 1957-61.
- Raf’ (98)*: Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī, *Raf’ al-Iṣr ‘an Quḍāt Miṣr*, ed. by ‘Alī Muḥammad ‘Umar, al-Qāhira, 1998.
- ar-Rawḍ*: ‘Abd al-Bāsiṭ, *ar-Rawḍ al-Bāsim fī Hawāidh al-‘Umr wa-t-Tarājim*, Vatican Library, Vatican Arabo, 728, 729.
- Wajiz*: as-Sakhāwī, Shams ad-Dīn, *Wajiz al-Kalām fī-dh-Dhayl ‘alā Duwal al-Islām*, 4 vols, ed. by Bashshār ‘Awwād Ma’rūf et al., Bayrūt, 1995.

〔研究〕

- Farah, C. E. (67): Farah, Caesar E., *The Dhayl in Medieval Arabic Historiography*, New Haven, 1967.
- Reynolds, D. F. (01): Reynolds, Dwight F. (ed.), *Interpreting the Self, Autobiography in the Arabic Literary Tradition*, Berkeley, University of California Press, 2001.
- 菊池 (97): 拙稿、「我が父ハリール・ブヌ・シャーヒーーン——‘Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī の記述の比較研究」『西南アジア研究』No. 47 (1997), pp. 53-73.
- 菊池 (00): 拙稿、「マムルーク朝時代15世紀末の一史書の成立過程について——‘Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī のイスラム暦848年／西暦1444年4月20日から1445年4月8日の叙述の検討を通じて」『東洋史研究』第59巻第3号(2000), pp. 34-81.

(追記) *Nayl al-Amal* については2002年に校訂本が刊行されたと知らされたが、脱稿後のために本稿では利用できなかった。その評価は、別稿を期したい。